〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕昌泰四年〇延喜元年十一月十八日丙寅、近來小鳥如雲凝、朝西方飛向、暮東方飛歸、

〔和漢三才圖會四十一禽〕時珍曰、凡二足而羽曰禽〇略中山禽岩棲、原鳥地處、林鳥朝嘲、水鳥夜咬、山禽咮短而毛修、水禽咮長而尾促矣、

〔源氏物語若紫四〕明ゆく空はいとう霞みて、山のとり共も、そこはかとなくさえづりあひたり、

〔書言字考節用集五氣形〕鴆音昔同水鳥

〔萬葉集十九〕壬申年之亂平定以後歌

太王者、神爾之座者、水鳥乃、須太久水奴麻乎、皇都常成都、　作者未詳

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作

浪高之、奈何梶取、水鳥之、浮宿也應爲、猶哉可撓、

〔萬葉集八秋雜歌〕三原王歌一首

秋露者、移爾有家里、水鳥乃、青羽乃山能、色付見者、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月七日丁巳、天皇幸神泉苑、放鷹隼拂水禽、

〔紫式部日記〕あけたてばうちながめて、水鳥どもの、思ふことなげにあそびあへるをみる、

水鳥を水の上とやよそにみん我も浮たる世を過しつゝかれもさこそ心をやりてあそぶとみゆれど、身はいとくるしかんなりと、思ひよそへらる、

〔源氏物語二十玉鬘〕豐後のすけといふたのもし人も、たゞ水鳥のくがにまどへるこゝちして、つれづれにならはぬ有さまの、たづきなきをおもふに、〇略下　よみ人云らず

〔拾遺和歌集四冬〕題云らず

水鳥の云たやすからぬ思ひにはあたりの水も氷らざりけり